



視 点

副会長 飯塚弘志

医療問題に話題が及ぶ時、必ず他者から批判されることがある。その一つは薬価差益によるクスリ漬け、その2は、出来高払い制による検査漬け等、その3は社会的入院である。この3点が諸悪の根源であり、医療における悪の3点セットとしてやり玉にあげられる。

先日新聞に、上空から撮影した1枚のカラー写真が載っていた。“畑の真ん中にゴルフ場”との見出しである。27ホールもある真四角なゴルフ場が畑の真ん中にデンとある。平らな土地にアンジュレーションをつけ、人工池も巧みに配置している。

畑を買い取って、ゴルフ場を造った結果、“畑の真ん中にゴルフ場”となったのであろう。

トピックスである。しかし一寸別の見方、言い方をすれば、“ゴルフ場の回りは畑だらけ”となる。別にトピックスでも何でも無い。

同じ事実でも、一寸視点を変えると、全く異なった状況となる。

よく引用されるケースとして1枚の人物画が、ワシ鼻の老婆に見えたり、或いは可憐な少女に見えたりする。

それは視点の相違によって、老婆や少女に見えるのである。不思議なことに、老婆に見える時は決して少女の顔は出てこない。少女に見える時には、老婆の顔は浮かんでこない。

視点を変えなければ見えてこないのである。

先のペルー大使館の人質事件の時の、青木大使に種々の批判がなされていた。

人質解放された時に手を振ったのがケシからん、会見の時に煙草を吸っていたのがケシからんとのマスコミ報道である。ある時点の一寸した行動をつかまえて、一方的価値観で相手を切り捨て

てしまう。

実は、出迎えの人達の中に、知人の姿が見え、手を振っただけのことであり、緊張、興奮を抑えるために煙草を吸っただけのことである。悪しざまに言われる筋合いはない。

21世紀に向けて解決しておかなければならない問題は、薬価基準の問題、診療報酬、特に支払い制度の問題、医療サービス提供体制問題であろう。それらの意味、メリット、デメリット、その方法、予想される結果等々、あらゆる角度、視点から検討を加える必要がある。

財政を主体としたアプローチも当然必要なのかもしれない。しかし、基本的には“適切な医療”をどのように構築していくか。そのための適正なフィーはどうあるべきか、という発想が重要となろう。

そのためには既存のパラダイムを捨て去って、新しい衣のもとで、再構築していかなければならない。

物事は一方的価値観で判断し、コトの是非を論ずべきではない。できるだけ幅広い角度、視点から物事を見極め、その是非を論ずるべきであろう。しかも単に批判のみではなく、創り上げていく姿勢こそ大事なのではあるまいか。

創造のない批判は猿でもできる。

シュムペーターの言う如く、今こそ“創造的破壊による革新”が必要なのではあるまいか。

